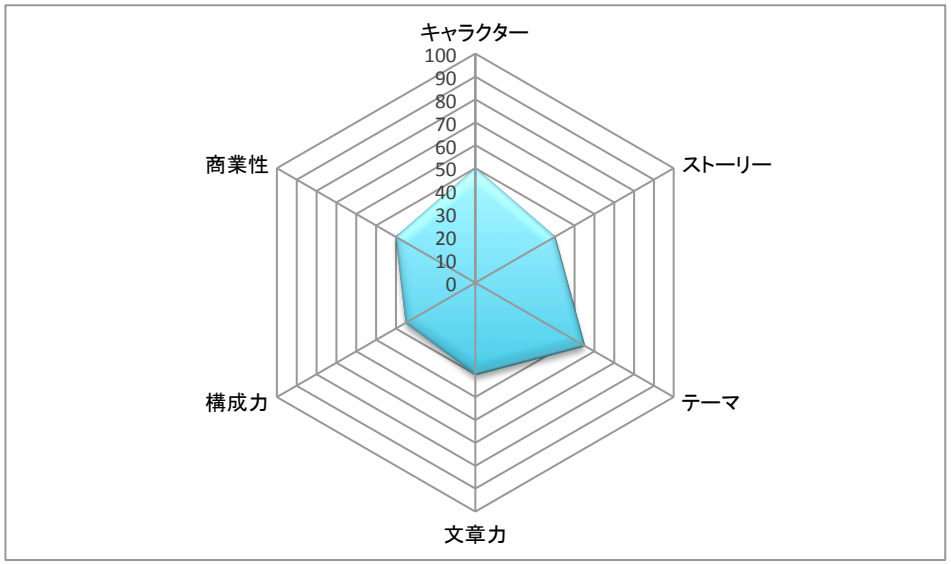
第1回　ライトノベル作法研究所主催　大夏祭り大会　選評評価シート

作品名：「ピンぼけゴールド」　　テーマ：「日本人なのに、日本人じゃない美少女」

キャラクター	ストーリー	テーマ(設定)
50	40	55

文章力	構成力	商業性
40	35	40



・見受けられる基礎的な問題点

●	・キャラクターに個性がない(もしくはその個性を生かしきれていない)
	・キャラクターの設定にオリジナリティがなく、読んでいて新鮮さに欠ける
	・キャラクターの行動に動機がなく、物語がご都合展開になってしまっている
	・物語の方向性が定まっておらず、読む側にだるさを感じさせてしまっている
●	・物語に登場人物達にとっての障害が登場せず、盛り上がりに欠ける
	・テーマ(世界観)が既存の作品の焼き回しで差別化されていない
	・物語上必要のない設定を多く登場させ過ぎている
	・意味の無い暗いテーマ(人の死、暴力等)が扱われており、後味が悪い
●	・プロットの練り方が甘い(基本的な起承転結が意識されていない)
	・時系列の流れが不自然、もしくは視点移動が多過ぎて構成が理解しにくい
	・物語の情景描写が足りず、読んでいて状況を想像できない
	・文章が難解かもしくは文法的に問題があり、よく読まないと内容が理解できない
	・伏線的な要素がなさすぎて驚きに欠ける
	・笑いをとれる下ネタが少なく、読んでいて冷める下ネタが多い
	・「この作品の最大の魅力はこれ！」というものがない

・総評（もしくは、今後これをやったら更に面白い作品を書けるようになるかもという話）

・この作品の最大の魅力はやはり「ロニー」であるので、冒頭すぐから「ミナサン。ドウモ。ハジメマシテ。ハンナデス」でロニーを登場させた方が、初めてしまった方が読者をぐいと作品に引き込み易くなると考えられる。生徒の前での自己紹介が事実上読者へのロニーの紹介ともなり、構成的にも都合が良くなる。きんモザのデースとはまた違った味がある外国人少女であり、その設定自体はとても良かった。
・これから筆力を向上させるための極端な手段の一つとして、地の文封印(多少の状況説明はあるもののほぼ会話だけの小説)で読む側の笑いを取れるかどうかチャレンジするという試みがありな気がする。作品全体から、会話でとりきれなかった笑いを何とかして地の文で補おうと、地の文由来の笑いに逃げる傾向があるように感じられた。少なくとも地の文が多ければ多い程ギャグ的な笑いはとりにくくなるため、いっそ一般小説的にインテリ風な笑いを取りに行く作品作りに徹底するか、あえて馬鹿な文章のみを用いてラノベ的な笑いをとりにいく作品作りでいくか、どちらかに作風を傾けきった方が良いように感じる。

合計加点ポイント 0

総得点：　260 / 600

B方式総合得点：　11267 点